

第二章 夕霧の物語 光る源氏の子息教育の物語

[第一段 子息夕霧の元服と教育論]

*大殿腹の若君の御元服のこと(故太政大臣の故姫君のお産みになった若君の御元服の儀式を)、思しいそぐを(準備を為さいます)、二条の院にてと思せど(光君は二条院で行いたいと御思いになるものの)、大宮のいとゆかしげに思したるもことわりに心苦しければ(大宮がとても御覧になりたがっていらっしゃるのも尤もに気兼ねして)、なほやがて*かの殿にてせさせたまつりたまふ(やはりそのままあちらの御邸で式を挙げなさいます)。*「大殿腹の若君」は注に<葵の上の生んだ夕霧。十二歳。「大殿腹」は太政大臣の姫君(葵の上)の生んだの意。>とある。*「かの殿」は注に<三条宮邸をさす。>とある。が、かつて、左大臣家を「三条宮邸」と由緒立てて説明した記述は無かったように思うので、唐突で違和感を覚える注釈だ。

*右大将をはじめきこえて(右大将を筆頭に)、御伯父の殿ばら(若君の御伯父になる左大臣家の殿方たちは)、みな上達部のやむごとなき御おぼえことにてのみものしたまへば(みな政府最上層部の帝の御信任の厚い方々ばかりでいらしたので)、*主人方にも(その方々も実力がお有りなので)、我も我もと(競って)、さるべきことどもは(費用の掛かる装束や装飾や引き出物や会食などの仕度を)、とりどりに仕うまつりたまふ(それぞれにご負担なさいます)。おほかた世ゆすりて(その結果、京中の話題になるほどの)、所狭き御いそぎの勢なり(祝儀物に溢れた豪勢な式場が用意されました)。*「うだいしゃう」は注に<もとの頭中将をさす。「薄雲」巻で、大納言兼右大将になっている。>とある。*「あるじがた」は注に<主催者方、すなわち右大将側をいう。>とある。作者の、この図式の指摘は意味深く感じる。

*四位になしてむと思し(光君は若君に四位の位を与え近侍の職に就かせようとお考えになり)、世人も(宮中の人々も)、さぞあらむと思へるを(そうなさるだろうと思つて居たものを)、*注に<源氏の心中。『集成』は「親王の子は従四位下に叙する規定であるが、一世の源氏の子の場合は従五位下が通例である。源氏の場合は親王に准じたものか」と注す。>とある。光君の内大臣の地位と太政大臣家の家格が、周囲に若君の親王に準じた位階を認めさせたのだろうか。まさか帝が、実父である光君の子であれば親王と同格だと、表立って言えるはずも無い。いずれにしても、実質で人事を含む政務を統べているのが光君であることは周知の事実ではあろう。

「まだいと*きびはなるほどを(まだとても幼い子を)、わが心にまかせたる世にて(私が自分の意のままに計らえるからと言って)、しか*ゆくりなからむも(そのように早く取り立てるのも)、なかなか目馴れたることなり(却って配慮が足りなく思える)」と思しとどめつ(と光君は思い止まりなさせて、)。*「きびは」は<幼少でか弱いさま>と古語辞典にある。語源の説明が無いので、勝手に考えてみる。「きびきび」という擬音は<小回りの利く動き>を思わせるから、走り回る子供(わらは)という意味で「きびは」、というのはどうだろう。また、「きび」は<《「羈(き)」は馬の手綱、「縻(び)」は牛の鼻綱の意》つなぎとめること。また、そのもの。束縛。>と大辞泉にあつて、御せられる子供という意味の「きびは」。また、「きび」は<駿馬(しゅんめ)の尾>ともあり、「驥尾に付す(きびにふす)」の<《青蠅が名馬の尾につかまって1日で千里の遠方に行ったという、「史記」伯夷伝の故事から》すぐれた人に従って行けば、何かはなしとげられる。先達を見習

って行動することを、へりくだった気持ちでいう言葉。驥尾に付(つ)く。>という意味の言葉もあって、未熟な子供という意味の「きびは」もありそうだ。が結局、定説は不明。*「ゆくりなし」は<ゆっくりではない>だろうか。そうすると<性急な>という感じになるが、此処ではもっと客観的なく早い出世>を意味しているようだ。

*浅葱にて*殿上に帰りたまふを(若君が生家で元服の儀を済まされた後で、下位の六位の浅葱色の袍を着て御所にお帰りになるのを)、大宮は、飽かずあさましきことと*思したるぞ(大宮はご不満でとんでもない事とお考えになって)、ことわりによりとほしかりける(その訳を光君に質したいと強く御思いになりました)。*「浅葱(あさぎ)」は注に<六位の浅緑色の袍姿。>とある。Wikipediaに水色の色見本があり、新撰組が羽織で使用、との説明文もあって分かり易い。*「殿上に帰り」については、注に<三条宮邸で元服の式を済ませて、六位の袍姿で清涼殿の殿上間に還る。すでに童殿上していたので「帰り」といったもの。>とある。ところで「殿上人(てんじゃうびと)」はWikipediaに<日本の官制において五位以上の者のうち、天皇の日常生活の場である清涼殿南廂へ昇ることを許された者のこと。清涼殿の殿上の間(ま)に昇ることを昇殿(しょうでん)と呼び、五位以上でない六位蔵人も例外的に昇殿を許され殿上人に含まれる。>とあり、六位は天皇側近としては最下位という身分である。大宮の憤慨も尤もかも知れない。*「思したるぞ」の「ぞ」は強調の係助詞で、文末の活用語は連体形をとる、という典型的な掛り結びの語法らしい。此処でも「いとほしかりける」の「ける」は過去回想の助詞「けり」の連体形となっている。典型的な語法ということで、多くの場合は「ぞ(～というものは)」「ける(～のようだった)」という読み方が出来るのだろう。そして訳文は<お思いになったのは、無理もなく、お気の毒なことであった。>としてある。しかし、「ことわりによりとほしかりける」を字句に準って言い換えれば<その理由に強く疑念を覚えたようだ>であり、少なくとも此処での文意はこの字句通りの方がよりずっと素直に理解できる。せっかく素直に原文を読める箇所を、文型に捉われて<無理も無く、お気の毒だった>と類型処理するのは、専門家の陥り易い過失ではないだろうか。過失とまで言ってしまうのも僭越だが、大宮ほどの貴人に対する外形描写に「ぞ」「かりける」は無い、ように私は感じる。有るとすれば、良く分からないが例えば「も」「かりけれ」くらいだろうか。だから、此処の「ぞ」「かりける」は内面描写に違いない。思うに「係り結びの語法」というのは、「ぞ」と一旦昂ぶった語調は、単純終始の「けり(～だった)」では物足りなく、仮定の「けれ(～だったかもしれない)」では宙ぶらりんで、ということは私などは敢えてそういう意図の言い方もありそうにも思うほどで、せいぜい体言(述語を名詞化して客観的な概念表現を意図したもの)に付ける「ける(～ということだった)」という連体を意図した語尾変化の勿体ぶった言い回しで文を纏めるのが座りが良い、という説明に過ぎないのではあるまいか。多くの場合に一定の語法が同様に読み下せるからと言って、それは確かに分かり難い文を理解する時には有効な方法ではあるだろうが、本来の語調を感じ取れる時にまでその手法をとっては主客反転した本末転倒だ。つまり、この「思したるぞ」は正に前句強調修辭の言い回しの結びとして「ける」と表記されたもので、「ぞ」を言い換えるなら<～ということ>で>となって、敢えて「ぞ」の意味を読むなら「いと」に掛かるのであり、文意として「ぞ」が「かりける」に掛かるものではない。実は、此処の箇所はチョッと気になったくらいの事だった。そして、いざノートに書き出せば長文の説明になりそうに思えて、このノートは省略したい気になったが、やはり気になってノートした。

御対面ありて(大宮は光君にご対面なさって)、このこと聞こえたまふに(この事をお尋ねなさると)、

「ただ今(今だけのことなら)、かうあながちにしも(こう極端にしてまで)、まだきに*老いつかすまじうはべれど(まだそれほどは若君の歳をとった後の先読みをすることも無いようには存じますが)、思ふやうはべりて(思うところが御座いまして)、大学の道にしばし習はさむの本意

はべるにより(大学での勉強をしばらくさせたいと思うものですから)、今二、三年を*いたづらの年に思ひなして(もう二、三年は無官のまままでと考えまして)、おのづから朝廷にも仕うまつりぬべきほどになれば(やがて公務を勤める時になれば)、今(その時にこそ)、人となりはべりなむ(然るべき処遇をする心算で居ります)。 *「老いつかす」は<歳を取らせる→歳を取った者として見る>か。詰まりは「先読み」。 *「いたづら」については注に<『完訳』は「学生のうちは昇進しない」と注す。>とある。漠然とした語だが、具体的には「おほやけにもつかうまつりぬ」に対応しているのだろう。

みづからは(私自身は)、*九重のうちに生ひ出ではべりて(宮中で育ったものですから)、世の中のありさまも知りはず(世間の実情も知らぬままに)、夜昼、御前にさぶらひて(終日、帝の側に付いて)、わづかになむはかなき書なども習ひはべりし(お手すきの時に少しばかり読み書きを習いました)。 *「このへ」は<宮中>のことだが、大辞泉には<《昔、中国の王城は門を九重につくったところから》宮中。禁中。>と説明されている。

ただ、かしこき御手より伝へはべりしだに(畏れ多い帝の御手から教わりましたことでさえ)、何ごとも広き心を知らぬほどは(何事も広い知見を得ないうちは)、文の才(ふみのざえ、漢詩)をまねぶにも(を作るにも)、琴笛の調べにも(楽器を演奏するにも)、*音耐へず(ねたへず、中身が伴わず)、及ばぬところの多くなむはべりける(不十分どころが多くありました)。 *「耐ふ」は<応え得る=実力がある>。ただ、此処の言い回しは「ことふえのしらべ」を受けているので、「音耐へず」を<聞くに堪えない→下手な演奏←実力がない←中身が乏しい>と読む方が良いのかも知れない。

はかなき親に(頼りない親に)、かしこき子のまさる例は(賢い子が勝って育つ例は)、いとかたきことになむはべれば(とても望めない事で御座いますので)、まして、次々伝はりつつ(まして代々と経て行って)、隔たりゆかむほどの行く先(遠い子孫の行く末が)、いとうしろめたなきによりなむ(ひどく情けないものになるかと)、*思ひたまへおきてはべる(不安に思えて取り決めたので御座います)。 *「思ひ掟つ(おもひおきつ)」は<あらかじめ、どのように取り計らうかを心に決める。>と大辞泉にあり、<計画する>と古語辞典にある。

高き家の子として(身分の高い家の子として生まれ育ち)、官位爵位(つかさかうぶり、立身出世が)心になむ(思いのままに)、世の中盛りに(日頃の派手で贅沢な暮らしに)おごりならひぬれば(慢心して慣れてしまうと)、学問などに身を苦しめむことは(学問に精を出すことなどは)、いと遠くなむおぼゆべかめる(ずっと遠く避けてしまいがちなものです)。

戯れ(たはぶれ、遊び事や)遊びを好みて(音楽に興じながら)、心のままなる(自在に)官爵に(くわんしゃく、出世を)昇りぬれば(続けてしまうと)、時に従ふ世人の(時勢に従う下々の者が)、下には(したには、内心では)鼻まじろきをしつつ(苦笑しながら)、追従し(媚びへつらって)、けしきとりつつ従ふほどは(機嫌を取りながら従う内は)、おのづから人とおぼえて(周りから一目置かれて)、やむごとなきやうなれど(立派そうに見えても)、時移り(時勢が変わって)、さるべき人に立ちおくれ(実力がある縁者に死に別れて)、世衰ふる末には(権勢を失った後には)、人に軽めあなづらるるに(世の人々に軽蔑されるままに)、取るところなきことになむはべる(忘れ去られるばかりです)。

なほ(やはり)、才(ざえ、漢学)をもととしてこそ(を基礎にしてこそ)、*大和魂(我が国情に即した政策)の世に用ゐらるる方も(が実施される面に於いても)強うはべらめ(豊かな知見の恩恵を国民が得る実効性が高まることでしょう)。*此处で言う「やまとだましひ」は「国粹主義」やそれを国民に押し付けた恐怖政治下の<精神>などではない。「ざえ(大陸の知識)」に倣った日本の、正に政治家としての御霊(みたま、先祖に誓って国民に福音を実現する政策)という謙虚な思いである。実に感慨深い。この辺の作者の見識は式部省の漢学博士であった父の藤原為時の影響だろうか。

さしあたりでは(当面の無官は)、心もとなきやうにはべれども(情けないようでは御座いますが)、つひの世の(将来の国家の)重鎮(おもし、主要閣僚)となるべき心おきてを(を担うに足る気構えを培う素養を)習ひなば(身に着けておけば)、はべらずなりなむ後も(私がこの世から居なくなった後にも)、うしろやすかるべきによりなむ(安心できようということからの処遇です)。

ただ今は(今のところは)、はかばかしからずながらも(後れを取るようでも)、かくて育みはばらば(内大臣の私がこうして世話するものを)、*せまりたる大学の衆とて(身分の低い貧相な大学生と一緒にして)、笑ひあなづる人もよもはべらじと思ふたまふる(笑い蔑む者もよもや居るまいと存じます)」 *「せまる」は<貧しくて生活に困る>と古語辞典にある。今に変わらぬ、収入の無い学生の姿のようだ。また、「衆(しゅう)」は<ある集団を形づくる人々>と大辞泉にある。

など(などと光君が)、聞こえ知らせたまへば(わけをお話し申しなさると)、うち嘆きたまひて(大宮はため息を御吐きになって)、

「げに(そうでしたか)、かくも思し寄るべかりけることを(御父上の光君がそこまでお考えになっていらした事です)、この大将なども(当家の右大将なども)、あまり引き違へたる御ことなりと(若君を六位に止め置かれるのは余りに通常の例に引き比べて変わった御処遇だと)、かたぶけはべるめるを(首を傾げて不審がって居りましたようです)、この幼心地にも(若君自身も)、いと口惜しく(とても悔しがって)、*大将(だいしゃう、当家の大将や)、*左衛門の督の(さゑもんのかみ、左衛門府長官の)子どもなどを(子供の従兄弟などを)、我よりは下臆と思ひおとしたりしだに(自分よりは身分が低いと見下して居りましたのに)、皆おのおの加階し昇りつつ(皆がそれぞれ出世して位が上がって)、およすげあへるに(大人びてゆくのに)、浅葱をいとからしと思はれたるに(下位の水色の上着をととても辛いと御思いで居らしたのが)、心苦しくはべるなり(可哀相で御座います)」 *「大将」については、大宮腹の太政大臣家の長男であり、大納言兼右近衛府長官と既に説明されている。「左衛門督」は別腹の恐らくは次男だが、衛府長官の多くは中納言の兼務であり、少なくとも参議ではあったらしい。つまりは両者共に軍人であり警察官僚であり、主要閣僚である。そして軍人は閣僚の中でも権力を体現するものであり、他の参議とは別格なのだろう。ただ、権威ということでは彼らの上に大臣が居る。何と、この家は正に時の日本の政治中枢なのであった。

と聞こえたまへば(とお話しなさったので)、うち笑みひたまひて(光君は微笑みなさって)、

「*いとおよすげても(ずいぶん大人びたもののように)恨みはべるななりな(不平を言っているようですね)。いとはかなしや(何とも他愛の無い)。この人のほどよ(あの子の成長振りなのだろうか)」 *「いとおよすげても」の「も」について、注は<「も」は係助詞、強調の意。接続助詞、逆接の意もある

が、とらない。>とある。思うに、「も」は「いとも」の「も」の変用ではないだろうか。尤も、「いとも」も古語辞典で連語と記され、結局「も」は強調と説明されているが、私は<強調>とは少し違うと思う。これは感覚的な言い方になってしまうが、この「も」は「もやう(模様、ありさま)」の「も」で<伝聞された状況に対しての推測>を意味しているように感じられる。実際に、この文は「ななりや(～のようですね)」と結ばれているのだから、<一つの推論として>という意味で符合している。言わば、「～とも見えて」の「も」だ。

とて、いとうつくしと思したり(若君をととても可愛らしく御思いになりました)。

「学問などして(勉強して)、すこしものの心得はべらば(もっと物の道理を知れば)、その恨みはおのづから解けはべりなむ(その不満は自ずと解けましょう)」

と聞こえたまふ(と光君は大宮に申しなさいます)。

[第二段 大学寮入学の準備]

字つくことは(若君が大学寮に進むことになったので、学者先生から漢学式の学生名を付けて貰う入学式が)、東の院にてしたまふ(東院で行われます)。「あざなつくことは語感からも風習としても今に伝わらない分かり難い語だが、何故か注釈は無い。「あざな」は「あだな」と同じで<他人が呼びならわした本名以外の名。>という意味もあるようだが、此処での「あざな」は本来の<中国で、男子が成人後、実名のほかにつけた名。実名を知られることを忌(い)む風習により生じ、字がつくと実名は諱(いみな)といってあまり使わなかった。日本でも漢学者などが用いた。>と大辞林に説明される意味で使われているようだ。ただ<実名を知られることを忌む風習>については、Wikipediaに「諱は軽々しく用いられることは忌避され(ために日本に入って「忌み名」と訓じられた)、同時代人に対しては親や主君などの特定の目上の人物だけが諱を使用し、それ以外の人間が諱で呼びかける事は極めて無礼な事とされていた。」と解説され、更に「なお、その人物が官職に就いた場合は官職名で呼ぶことが優先された。この場合、親しい間柄以外は、字で呼ぶことは、諱ほどではないにしても少々無礼なこととされていた。」と説明されている。つまり「あざなつく」は、若君が大学寮の学生(がくしゃう、有給受講者)となるので漢学者の伝統に則って通り名を先生に付けて貰う事に為った、ということのようだ。が、これが「こと」として儀式が執り行われたのだから、事実上の入学式の「こと」なのだろう。寮生としての学業区分を決めるには試験が必要かもしれないが、貴公子の入学自体に試験の有る筈は無いのだから。それに実際問題として、若君が無官で形式上は身分が低いとはいえ、家柄や血筋は教師たちよりはるかに高貴であってみれば、教える立場上は優位な学者も若君を諱で呼ぶことも出来ず、かと言って無官では職掌名でも呼べないので、字は絶対に必要でもあったのだろう。ところで、唐の先進文化を吸収した時の日本の指導者たちが、国家運営に有用と思われる学識および技能の発展を図るべく、律令制下の統治体制に於いて予算執行し管理警察して設立した、諸々の職(しき)・寮(りやう)・司(つかさ)という専門家集団の組織が、道路整備と食糧増産という当世の社会資本の蓄積も相まって豊かな社会を実現して行くという、この物語の背景である官製技能組織形態自体が社会発展を担うという目覚しくも分かり易い発展期のルポとして此処の章は、管理警察機構が律令初期の中央集権から荘園自治へと地域分散してゆく中においても、国力が技能学識によって築かれるという作者の基本認識が示されている行の様な気はする。この作者は女房語りの体裁を取りながら、もしかするとそれだけに実際の権力抗争から一步引いた視点で冷静に、国家概念を述べている箇所が間々あって、此処の場面でも光君の口を借りて相当に理屈っぽい事を書いていて、多分それがこの物語の広い評価に繋がっているのだろう。尤も、教育ママの保身的精神構造は生物生理の面からも既に数多く

解説されているから、こんな勿体ぶったノートをするまでも無く、女らしい視点という言い方も出来るのかもしれない。が、それにしても、この箇所注釈が無いのはやはり不思議で、単純に意外だ。

東の対をしつらはれたり(東の対が式場に用意されました)。上達部、殿上人、珍しく*いぶかしきことにして(珍しく興味深い儀式なので)、我も我もと集ひ参りたまへり。 *「いぶかし」は<判然としていない事が気に掛かって心が晴れない>を原義とする、と古語辞典に説明されている。此处では<不審に思う>ではなく<興味深い>という語感らしい。高貴な人は、学者の意見が聞きたければ自邸や職場に彼らを呼び付ければ良い訳で、学者にしても呼ばれる事で箔が付くし、実際に謝礼の実入りもあつたに違いない。その高貴な人が、学識の実力で出世を図らなければならない下級貴族のような学生になることは、やはり異例だったのだろう。まして、半ば私的な師弟関係で行われる「あざなづけ」など、普通は麗々しい儀式になるものでもなく、本来は学者先生が主体的に自分の見識の一端を仰々しく披瀝して<名付けて遣る>といった立場のものが、居並ぶ貴人の前で皆が納得する名前を<付けて見せろ>と御膳立てされてしまう訳で、学生側から供給される学者の立場の無さは、その設定自体が落語だ。

*博士どももなかなか臆しぬべし(呼ばれた学者先生たちも普段なら自分たちより身分の低い子弟を引き立てて遣るべき名付けを大臣家で公開して行う立場の無さに、何とも気拙かったようです)。 *注に<文章博士、定員は一名。「ども」は複数を表す接尾語。『集成』は「「ども」とあるのは、そのほか詩文にすぐれた儒者が参加しているからであろう」と注す。「臆しぬべし」は語り手の推測。>とある。「文章博士(もんじゃうはかせ、中国史書から教養を学んで詩文作成を指導する)」の<定員一名>とあるのは、この人が昇級試験の監督責任者で実質で学長だったという意味なのだろう。ただ、名誉職としての大学頭(だいがくのかみ)は親王や大臣が別当として就いた事もあつたらしい。また学者としての「漢学博士」には、儒教思想を教える次席級の「明経(みゃうぎやう)」の他にも、法律の「明法」、算術の「算」、発音の「音」、字体の「書」、などの博士(教授)が居た、との事。そして学生の中には、昇級試験に合格した有資格者として官僚を目指す者も居れば、さらに学業を極めようとする者も居たのだろう。大学の社会的役割自体は今に変わらない。

「*憚るところなく(我が邸内だからといって、客人としての遠慮などする事無く)、例あらむにまかせて(慣例に従って)、なだむることなく(温和な姿勢で臨まず)、厳しう行なへ(威厳を持って式を執り行いなさい)」と仰せたまへば(と内大臣が仰せになると)、 *こういうのを無茶振り、というのだろう。「遠慮するな」と命じられて、それに従うこと自体が、主人に服して自己の立場の主張を<遠慮する>ことになるのだから。通常の「字つくること」は大内裏内の官舎か、仮に式部卿の計らいで御所内の殿舎を使う事があつたとしても内輪の出席者だけで、博士自身が朝廷の権威を体現しながら質素ながらも厳かに執り行われたようだ。それが、今をときめく内大臣の麗々しい御殿で、居並ぶ高級官僚たちの前で、御曹司の学生に対して儀礼上は優位に振舞わなければならない借り猫状態となった学者たちの之の上ない居心地の悪さは、尊敬されるべき学識者に実権の無さを思い知らせる、という権力者による殆んど苛めのようなものである。しかし、それでも光君に悪意は無く、学者たちも内大臣に呼ばれた晴れがましさを誇りに思うという様子は、やはり滑稽譚ではある。

しひてつれなく思ひなして(学者たちは強いて愛想を隠して)、家より他に求めたる装束どもの、うちあはず(借物装束が着こなせないまま)、かたくなしき姿などをも恥なく(頑なに世慣れない姿勢をも省みず)、面もち(学問一筋の険しい顔つきに)、声づかひ(重々しい声使いで)、*むべむべしくもてなしつつ(尤もらしく格式ばった所作をして)、座に着き並びたる作法よりはじめ(座に着いて並んでいる格好からして)、見も知らぬさまどもなり(大臣家では滅多に見ることのない

華やぎとは似合わない人々でした)。 *「むべむべし」は「肯肯し(うべうべし、うなずけるような)」と同じでく尤もらしい、形式ばっている>、と古語辞典にある。

若き君達は(若い貴族の子弟である学生の列席者たちは)、え堪へずほほ笑まれぬ(たまらず苦笑してしまいました)。 *さるは(実はこの者たちは)、もの笑ひなどすまじく、過ぐしつつ(決して嘲笑などしないで役目を果たせそうな)静まれる限りをと、選り出だして(落ち着きのある者たちばかりをと大臣が選り出して)、瓶子(へいじ、徳利)なども取らせたまへるに(などを持たせてお酌係にさせていらしたのだが)、筋異なりけるまじらひにて(いつもとは趣向の違う宴席なので、この者たちの接待が行き届かず)、右大将、民部卿などの、おほなおほな土器とりたまへるを(主賓の右大将や民部卿などまでが各自で手酌なさるほどだったのを)、あさましく咎め出でつつおろす(博士たちは接待係の不手際だと大げさに咎め立てて叱り付けます)。 *「さるは」は<上の叙述を受けて、実装実態を説明し始める>接続詞、と古語辞典に説明され、<順接もあるが逆接が多い>ともあるので、<その実、実は>と言い換えられそうだ。ところで、此処以下の文が、多分、今となつてはだろが、主語の分かり難い可也の難文で、訳文ではどうも右大将や民部卿が博士たちに非難されたかのような解釈らしいが、それは有り得ない、と私は思う。右大将は大納言であり、この時点ではその地位は未だ確立されてはいないかも知れないが、藤氏長者かそれに一番近い人物である。また、民部卿は光君の弟宮にして、帝の兄宮という貴人である。これらの人物は学者ふぜいが非難はおろか、意見でさえ求められなければ具申できない相手だろう。ただ博士たちが非難したのは確かなので、その相手を想定すれば、やはり学生である「若き君達」以外には見当たらない。だから「さるは」はそういう文意を示すに違いない。また構文上も、「へいじなどもとらせたまへるに」「かはらけとりたまへるを」「とがめいでつつおろす」と解せるので、後はそれらの各述語の主語を探すだけだ。

「*おほし(そもそも)、垣下饗(かいもとあるじ、列席者諸君は)、はなはだ非常に*はべりたうぶ(全く以って非常に多く御出でるが、それでも)。かくばかりのしるしとある*なにがしを知らずしてや(斯く在る中にも天下に知られた貴人に心配り出来ずして)、朝廷には仕うまつりたうぶ(朝廷に仕えようなどとの学生諸君のご存念たるものは、)。はなはだをこなり(全く以って愚かしい限り也)」 *「おほし」は注に<以下「をこなり」まで、博士どもの詞。『集成』「凡し」。総じての意。大学内で用いられた特殊の語であろう。『完訳』「凡そ」の転。「はなはだ」「非常」も漢文訓読調。儒者らしい語>と注す。>とある。「垣下饗」は<「ゑんがの座」に着いて饗応を受けること>と古語辞典にある。「ゑんがの座」は「垣下座」と表記され<朝廷や貴族の邸宅で催される饗宴での、正客以外の相伴の人が一列に座す場>とあり、此処での正客は若君なので、つまりはその他の学生列席者を云うのだろう。 *「はべりたうぶ」は注に<『集成』は「はべりたまふ」と同じ。一座に対して、話者自身を卑下して「はべり」と言い、一方右大将たちに話者の敬意をあらわして「たうぶ」と言う。この物語では、博士や僧たちが使っているが、用例は稀である。『完訳』は「古風なかたくるしい語感。ここは尊敬語」と注す。>とある。ただ、此処の「たうぶ」は「たまふ」+「も」が含意されて、後文と繋がるように思えてならない。が、もしかすると、「も」の含意は「おほし」の語法なのかもしれない。 *「なにがし」を話者の博士自身と解する訳文も有るようだが、此処の言い回しは学者らしい勿体ぶった漢語調で、実は右大将らの<貴人>を示しているものの、客観表現であるを以って敬語表現を避けて自己を偉そうに見せる、教授話法なのだと思う。なお「知らずしてや」の「や」は「をこなり」で結ぶので、「仕うまつりたうぶ」を条件項とする一連の続き文である。また、此処の「たうぶ」は公達である学生諸君に対する敬語。

など言ふに(などと学者が言うと)、人びと皆ほころびて笑ひぬれば(列席者が皆思わず笑い出したので)、また、

「*鳴り高し(喧しい)。鳴り止まむ(静かにせよ)。はなはだ非常なり(全く以って非常識也)。座を引き立て立ちたうびなむ(退席して頂きますぞ)」 *「鳴り高し。鳴り止まむ。」は注に<以下「立ちたうびなむ」まで、博士どもの詞。『完訳』は「儒者が学生を静める際の用語。風俗歌にもみえる」と注す。>とある。此処の注は相手を学生と明示している。

など、おどし言ふも(学者が学生たちを脅しつけて言うのも)、いとをかし(更に可らしい)。

見ならひたまはぬ人びとは(こうした光景を見慣れていない方々は)、珍しく興ありと思ひ(珍しく面白がっていて)、この道より出で立ちたまへる上達部などは(大学出身の上層部の高官たちは)、したり顔にうちほほ笑みなどしつつ(分け知り顔に笑みをたたえながら)、かかる方さまを思し好みて(内大臣がこうした大学寮のありさまを評価して)、心ざしたまふがめでたきことと(若君をご進学させなされたことを慶ぶべき事と)、いとど限りなく思ひきこえたまへり(ますますこの上なく敬服申すと話し合っていました)。

いささかもの言ふをも制す(少しの私語も制止する)。無礼げ(なめげ、行儀が悪い)なりとても咎む(と言っては咎める)。かしかましようののしりを顔どもも(そのように口やかましく学生を叱りつける学者たちの顔も)、夜に入りては、なかなか今すこし*掲焉なる(けちえんなる、明るくなった)火影に(ほかげに、燈火に)、*猿楽がましく(さるがうがましく、滑稽じみて)わびしげに(貧相な)、人悪げなるなど(見た目の悪さなど)、さまさまに、げにいとなべてならず(確かにいつもの上流社会とは違う)、さまことなるわざなりけり(変わった様子的大臣邸でした)。 *「掲焉」の「掲(けい、けち)」は<掲げる→目立たせる→明らかにする>で、「焉(えん、いづくんぞ、ここに)」は<状態を名詞化する語>とあり、学者の描写に用いることで格式ばった印象を付ける語用なのだろう。 *「さるがうがまし」の「さるがう」は「さるがく」の音便とあり、注には<『完訳』は「猿楽」は当時の滑稽な物まねの演芸。儒者の道化じみた姿」と注す。>とある。

大臣は(おとどは)、「いと*あざれ(まるで不真面目な)、*かたくななる身にて(ひねくれ者なので)、*けうさうし*まどはかされなむ(私などは先生方の注意に翻弄されて間誤付かされてしまいそうだ)」 *「あざる」は「狂る・戯る」とあり<常軌を逸して戯れる>から<ふざける、くつろぐ、洒落る>まで含むらしい。 *「かたくな」は「偏屈」が語源らしく、基本的に悪い評価で<頑固、意固地>よりは<ひねくれ者>。 *「けうさう」は<やかましくさわぐこと>と古語辞典にあるが原義不明ともあり、「喧騒」や「叫騒」が参照に示されていたが、今の「きょうそう」で引けば「狂想」や「狂躁」も類推され<翻弄される>も有り得るか。 *「まどはかす」は「まどはす」に同じとあり<迷わす、惑わす、まごつかせる、混乱させる>。

とのたまひて(と仰って)、御簾のうちに隠れてぞ御覧じける(御簾の内に隠れて一座の様子を御覧になっていました)。

数定まれる座に着きあまりて(用意された席が足りなくて)、帰りまかづる大学の衆どもあるを聞こしめして(帰ろうとする大学寮の学生たちがいるのを殿はお聞きになって)、釣殿の方に召しとどめて(彼らを池際の釣殿の方へ呼び寄せなされて)、ことに物など賜はせけり(若君の挨拶代わりの土産物などを与えなさいました)。

[第三段 饗宴と詩作の会]

事果ててまかづる博士(式が終わって退出する教授や)、才人ども(さいじんども、文学者たちを)召して(呼び止めなさって)、またまた詩文作らせたまふ(大臣はまた再び詩文を作らせなさいます)。上達部、殿上人も、さるべき限りをば(詩作に優れた者だけを)、皆とどめさぶらはせたまふ(皆とどめて同席させなさいます)。

博士の人びとは、*四韻(しゐん、五言八行詩を)、ただの人は、大臣をはじめたてまつりて、絶句(ぜっく、五言四行詩を)作りたまふ。 *「四韻」は四つの韻を踏む漢詩ということで、「五言律詩(ごごんりっし)」を示すらしい。Yahoo 百科などによると「律詩」は八行詩で一句五文字の五言律は2・4・6・8句の末語で韻を踏むので「四韻」、一句七文字の七言律は1・2・4・6・8句の脚韻、とのこと。また「絶句」は四行詩で、五言は2・4句、七言は1・2・4句で韻を踏む、とのこと。中国では七言絶句が主流とされるらしいが、此処では専門家の博士たちが五言律詩のようなので、その他の人々なら五言絶句だろうと想像する。

興ある題の文字選りて(この場に相応しい題の文字を選んで)、文章博士(もんじやうのはかせ、学頭が)たてまつる(発表します)。*短きころの夜なれば(夏の短夜の頃なので、各自の詩作が出来上がると)、明け果ててぞ*講ずる(夜が明けてしまっからの読み上げと成りました)。 *「みじか夜」は夏至の頃。夏至は北半球では夜が一番短くなる日で、旧暦であれば五月と定められる。今の暦なら6月22日頃になるようで、実は日本では梅雨の最中に当たって、雨では日の長さが実感できない。が、今年はカラ梅雨でこの頃から暑さが増したような気もするから、日の高さは実感させられた。 *「講ず(こうず、かうず)」はく詩会で歌を読み上げる>と古語辞典にある。

*左中弁(さちゅうべん、官房次官が)、講師(かうじ、読み手役を)仕うまつる(勤めます)。 *「弁官」は書記だが、太政官に仕えて省庁間の調整まで行った実務者のようで、行政実務を越えた政務官であり、今で言う内閣官房に近い役割かと想像する。Web サイト「官制大観」などによると、弁官局はあらゆる政務文書の作成を担ったようなので、当然に大学出身の文章生(もんじやうしゃう、資格試験合格者)が採用されたらしい。尤も、能吏であってみれば重用もされただろうが、同時に実務者である限り所詮は代えが利くのである。競争社会だ。それが参議まで出世すれば一角の権力を握って余人を持って代え難い重鎮になる、かというと事情は逆だ。むしろ一角の勢力を有した実力者しか参議以上の政治家には成れない。参議の定員は八名との事。他の政務官を見ても、定員各一のカミたる大臣は別格だが、定員が増減するスケの納言を五名くらいとしても、参議を含めた政治家総数は十五名ほどだ。当たり前だが世の中は何処までも実力社会で、実力あってこそ諸勢力を封じ込め得る重鎮なのである。つまり、一介の弁官ではない左中弁(左弁局次長)ともなれば、その地位自体が三等政務官のジョウであり、参議に匹敵するのだから、漢学に長じていることは当然の事として、元々それなりの家格の人物なのである。

容貌いときよげなる人の(姿かたちが綺麗な人で)、声づかひものものしく(声に落ち着きがあって)、神さびて読み上げたるほど(威厳を持って能く響き通って読み上げられた漢詩の数々は)、おもしろし(格調高く宮びでした)。おぼえ心ことなる博士なりけり(大臣もお気に召した学者ぶりでした)。

かかる高き家に生まれたまひて(若君はこのような立派な家柄に生まれ育ちなさって)、世界の栄花にのみ(せかいのえいがにのみ、この世の華やかさばかりを)戯れたまふべき御身をもちて

(楽しまれて良い御身の上ながら)、*窓の螢をむつび(窓の螢の光を読書の友として)、枝の雪を
馴らしたまふ(枝の雪に目を慣らして勉学に励みなさる)心ざしのすぐれたるよしを(御意向の優
れている事を)、よろづのことによそへなずらへて(あらゆる故事に例えに引いて)、心々に作り
集めたる句ごとにおもしろく(この場の出席者が思い思いに作り集められた句がそれぞれに味わ
いがあって)、「唐土にも(もろこしにも、本場の中国にも)持て渡り伝へまほしげなる(持って行
って伝えたいほどの)夜の詩文どもなり(よのふみどもなり、この夜の詩文の見事な出来映えだ)」
となむ(とのように)、そのころ世にめでゆすりける(その当時の世間では評判でした)。 *「窓の
螢」については、注に<『晋書』と『孫氏世録』を出典とする故事。『蒙求』「孫康映雪車胤聚螢」にある。『源氏
積』が初指摘。>とある。この故事は、卒業式の唱歌に知るスコットランド民謡の日本語歌詞「螢の光、窓の雪」の
出典でもある。それが「源氏積」の初指摘とは感慨深い。「源氏積」は<源氏物語の最古の注釈書。1巻。藤原伊行(ふ
じわらのこれゆき)著。平安末期ごろ成立。源氏物語の本文中に、故事・出典などを書き入れたもの。藤原定家の「興
入(おくいり)」のもととなった。源氏物語積。>と大辞泉にある。また「蒙求(もうぎゅう)」は<《「易経」の一句
「童蒙我に求む」による》中国、唐代の類書。3巻。李瀚(りかん)撰。「孫康(そんこう)映雪(えいせつ)、車胤(し
ゃいん)聚螢(しゅうけい)」のように、上代から南北朝までの有名人の逸話で類似の事跡を一对とし、4字句計569
句の韻文で、8句ごとに韻を変える幼童用の教科書。日本には平安時代に伝わり、盛んに学ばれた。>とある。「易
経(えききょう)」は儒教の教科書。「孫康映雪車胤聚螢」は「螢雪(けいせつ)」「螢窓(けいそう)」の故事で<《貧乏で油
が買えず、晋の車胤は螢を集めてその光で読書をし、また、孫康は窓の雪明かりで勉強したという、「晋書」車胤
伝の故事から》苦学すること。>とある。

大臣の御はさらなり(大臣の御作は言うまでも無く素晴らしいものでした)。親めきあはれなる
ことさへすぐれたるを(親らしい情愛まで良く表れていた)、涙おとして誦じ騒ぎしかど(列
席者は涙を流して読み返して褒めていましたが)、女のえ知らぬことまねぶは憎きことをと(女の
語り部には分からない漢詩のことをお話するのは僭越だと)、うたてあれば*漏らしつ(差し障
る向きもあるので是くらいで止めて置きます)。 *「漏らしつ」は「洩らす(逸する、取り逃す)」の連用形に
完了の助動詞「つ」が付いたものだ。此处での「洩らす」は<書き損じる>だろうが、「つ」は客観完了ではなく意志完
了とされるので、「漏らしつ」は<わざと書き損なって置く→書かないで置く>だ。

[第四段 夕霧の勉学生活]

うち続き(こうした入学式に続いて)、*入学といふことせさせたまひて(大臣は若君に弟子入り
という事をさせなさって)、やがて(そのまま)、この院のうちに御曹司作りて(この東院の中にそ
の為に専用の勉強部屋を作って)、まめやかに才深き師に預けきこえたまひてぞ(本格的に漢学に
造詣の深い先生に任せ申しなさっては)、学問せさせたまつりたまひける(学問を始めさせ申し
上げなさいました)。 *「入学(にふがく)」は「入門」のことで<弟子入り>。で、それを「と言ふこと」とは<~
と世間で言われていること>だから、ますます貴人の子弟なら<普通はしないようなこと>を印象付ける。

大宮の御もともにも(若君は御祖母の大宮の所にも)、をさをさ参うでたまはず(頻繁にはお出か
けなさいません)。夜昼うつくしみて(宮は若君を始終可愛がって)、なほ稚児のやうにのみもて
なしきこえたまへれば(今なお幼児のようにばかり接しなさるので)、かしこにては(あちらのお
屋敷では)、えもの習ひたまはじとて(とても勉学に勤しめない)、静かなる所に籠めたてまつ
りたまへるなりけり(大臣は若君を静かな部屋に囲い申し上げなさいました)。

「一月に三度(ひとつきにみたび)ばかりを参りたまへ(ほどの御訪問に致しなさい)」とぞ(どのように)、許しきこえたまひける(許し申しなさっていらっしやいました)。

つと籠もりみたまひて(若君はじっと部屋にこもって勉強なさって)、いぶせきままに(気持ちの晴れないままに)、殿を、

「つらくもおはしますかな(厳しい御しつけだな)。かく苦しからでも(こんなに苦労しなくても)、高き位に昇り(出世して)、世に用ゐらるる人はなくやはある(重用される人が居なくも無い例は在るのに)」

と思ひきこえたまへど(と思い申しなさるが)、おほかたの人がら、まめやかに(本来の性格が真面目で)、あだめきたるところなくおはすれば(浮ついた所が無くて御出でなので)、いとよく念じて(とても良く集中して)、

「いかで*さるべき書どもとく読み果てて(何とかして決められた教科書類を早く読み終えて)、交じらひもし(役所勤めもし)、世にも出でたらむ(出世もしたいものだ)」 *注に<『集成』は「『史記』『漢書』『後漢書』の三史と『文選』などが紀伝道のテキストであった」と注す。「帚木」巻に「三史五経の道々しき」とあった。>とある。深入りは避けたい。

と思ひて、ただ四、五月のうちに(ほんの四、五ヶ月の間に)、『*史記』などいふ書(「史記」などという大書を)、読み果てたまひてけり(読み終えてしまわれました)。 *注に<『史記』百三十巻、大著である。それを四、五月で読破とは夕霧の猛勉強ぶりを表す。>とある。深入りは避けたい。ただ、夏から五ヵ月後なら、後の話は年末か少なくとも冬以降のことになるのだろう。

[第五段 大学寮試験の予備試験]

今は*寮試受けさせむとて(大臣は若君にそろそろ学生試験を受けさせようということ)、まづ我が御前にて試みさせたまふ(まず御自分の前で学力を試させなさいます)。 *「寮試(れうし)」は注に<大学寮の試験。合格すると擬文章生になる。三史のうち、一史の五条を読ませ、三条以上に通じた者を合格とする。>とある。その擬文章生(ぎもんじゃうしやう、擬生)が式部省の文官試験(省試)を受験して、及第となれば文章生として幹部候補生になるようだ。年末に行われた試験、とのこと。

例の(例によって)、*大将(右大将兼大納言)、左大弁(左弁官局長官)、式部大輔(しきぶのたいふ、式部省次官)、左中弁(左弁官局次官)などばかりして(などの身内の高官だけを集めて)、御師の*大内記(だいないき)を召して(に命じて)、『史記』の難き巻々(「史記」の難しい漢文 130巻の中から)、寮試受けむに(寮試を受けるのに)、博士のかへさふべき(教授が繰り返して出題しそうな)ふしぶしを引き出でて(箇所の数々を引き出して)、一わたり読ませたてまつりたまふに(一通り若君にお読ませ申し上げなされると)、至らぬ句もなく(言いよどむ文もなく)、かたがたに通はし(諸説の解釈に通じて)読みたまへるさま(読みなさる有様で)、*爪じるし残らず(御師の注意指摘箇所もなく)、あさましきまでありがたければ(あきれるほど良く出来たので)、 *「大将」以下錚々たる顔ぶれの故太政大臣家のお歴々である。やはりこの家柄であれば、学者に付いて故事の由緒を詳しく

知るよりも、この叔父上たちの側で実務経験を積む方が有益に思えてくる。由緒を知って悪いはずはないが、知ったつもりで他者の意見を排するのは王者の道ではないだろう。確かに自分の価値観を持たなければ責任ある判断は下せないだろうが、価値観は学問だけから得るものではない。実務の中で、当事者から事情を聞き、問題解決のために幾つかの学者の意見を聞き、当事者および全体にとっての最良策を探るのは、もしかすると物の理解が最も深まるかもしれない。と同時に、政治家の処世として関係者から感謝され、彼らの忠誠を得ることは権力者に必須の才能である。人は、ということは世の中は、金と気持ちで動く。尤も、金と気持ちを動かす物の一つは学問なのかもしれないが、仮にそうした一理はあっても若君の無官は分不相応な処遇には違いなく、光君に明石入道にも似た偏屈ぶりは感じる。*「大内記」は中務省の公文書作成の首席官で正六位相当、とのこと。相当な学識者が就く実務職にして、権威有る高官なのだろう。*「つまじるし」はアンダーラインか。

「さるべきにこそおはしけれ(さすがに大したものだ)」と、誰も誰も、涙落としたまふ。大将は、まして、

「故大臣おはせましかば(父上が生きていらしたら、妹の忘れ形見の成長振りをさぞ喜んだことだろうに)」

と、聞こえ出でて泣きたまふ(言い出してお泣きになります)。殿も、え心強うもてなしたまはず(とても気丈に振舞えなされず)、

「人のうへにて(他人の親の場合だと)、かたくななりと見聞きはべりしを(見苦しいと見聞きしておりましたが)、子のおとなぶるに(子が成長するほど)、親の立ちかはり痴れゆくことは(親が反対に愚かしくなるとゆくというのは)、いくばくならぬ齢ながら(まだこの子は幾らでもない年付きながら)、かかる世にこそはべりけれ(こういう事を言うのですね)」

などのたまひて、おし拭ひたまふを見る御師の心地、うれしく面目ありと思へり(役目を果たせたと感じていました)。大将、盃さしたまへば、いたう酔ひ痴れてをる顔つき、いと痩せ痩せなり(ひどく痩せて心労の程が窺えました)。

世のひがものにて(この御師は世に媚びず)、才(ざえ、学識)のほどよりは用ゐられず(の高さの割には役人に取り立てられず)、すげなくて(人付き合いもなく)身貧しくなむありけるを(貧乏でいたのを)、御覧じ得るところありて(大臣は見込みなさる所が有って)、かくとりわき召し寄せたるなりけり(このように格別に若君の師としてお呼び寄せになったのでした)。

身に余るまで御顧みを賜はりて(大臣から身に余るご評価を頂いて大内記は)、この君の*御徳に(この若君の秀才の御蔭で)、たちまちに身を変へたると思へば(急に出世できたと考えてみると)、まして行く先は(ますます将来は)、並ぶ人なきおぼえにぞあらむかし(並ぶ者もない大臣の信任を授かるに違いない、と思えるのです)。*「徳」は古語辞典に、<優れた品性・人徳>とか<恩恵・功德>とか<天性・才能>とか<利益・富・財産>とあり、総じて「大きな恵み」を意味するようで、延いてはそういうものの<おかげ>という語法もあるらしい。

[第六段 試験の当日]

大学に参りたまふ日は(若君が大学寮に受験に参上なさる日は)、寮門に、上達部の御車ども数知らず集ひたり(門前に高官たちの牛車が数知れず集まっていた)。おほかた世に残りたるあらじと見えたるに(ほとんどの御歴々が居並んでいるかと思われる試験会場に)、またなくもてかしづかれて(最上に敬われて)、つくろはれ入りたまへる冠者の君の御さま(介添いを受けて入場なさる受験生の若君の御姿は)、げに(何とも)、かかる交じらひには堪へず(他の受験生たちとは一線を画して)、あてにうつくしげなり(上品で華やかでした)。

例の(一般の)、あやしき者どもの立ちまじりつつ(下級貴族の子弟である貧乏学生たちが押し寄せてきて)来りたる*座の末をからしと思すぞ(年の順で着座する受験席が最年少ゆえの末席なのを若君が嫌にお思いになるのも)、いとことわりなるや(至極尤もな事でした)。 *「どのすゑ」については、注に<『集成』は「大学における席次は長幼の序による。学生は十三歳から十六歳までの者から選んだが、夕霧は今十二歳で、最年少である」と注す。>とある。

ここにてもまた(この試験場に於いてもまた)、おろしののしる者どもありて(学生を扱き下ろして叱り付ける試験官たちが居て)、めざましけれど(異様な光景だったが)、すこしも臆せず読み果てたまひつ(若君はそんな雰囲気には少しは臆することなく問題をお解きになりました)。

*昔おぼえて(昔の隆盛が偲ばれる)大学の栄ゆるころなれば(学問が盛んな昨今の時勢なので)、上中下の人(かみなかしものひと、貴族各層の子弟が)、我も我もと、この道に志し集れば(寮試を受験しに集まるので)、いよいよ、世の中に、才ありはかばかしき人多くなむありける(漢学に通じた教養人が多くなっていたのです)。 *「むかし」は注に<平安時代初期、大学寮が重んじられていた時代をさす。>とある。

*文人擬生(もんになぎしゃう、擬文章生)などいふなる(などと言う資格の)*ことどもよりうちはじめ(各寮試の合格を初めとして)、すがすがしう果てたまへれば(良い成績を残されたので)、ひとへに心に入れて(さらに集中して)、師も弟子も(師である大内記も弟子である若君も)、いとど励みましたまふ(いっそう勉学に励みなさいました)。 *注に<文人擬生で一語。寮試に合格した擬文章生をいう。>とある。 *「ことども」と複数になっていることの意味は、大学寮の漢学に於ける歴史・政治理論・経済理論・文字・文学・法律・数学の各科目ごとに試験および合格者への資格認定と待遇が定められていたことを示している、と読んだ。

殿にも(とのにも、大臣は自邸に於いても)、文作りしげく(詩文作りの会を頻繁に催され)、博士、才人ども所得たり(教授や学者たちが活躍の場を得ました)。*すべて何ごとにつけても(また独り漢学に限らず、全て何事につけても)、道々の人の才のほど現はるる世になむありける(それぞれの技能や知識が評価されて豊かな社会が実現される光君の賢人政治の時代ということだったので)。 *注に<『集成』は「詩文に限らず、万事それぞれの道に励む人の才能のほどが発揮される時代であった。源氏の政道輔佐よろしく、万人所を得る聖代の様相」と注す。>とある。